

共創風土を醸成する「燦 presents『京産共創』プロジェクト」 —学生を中心とした Organization Development の取組—[†]

林 隆二*・乙倉 孝臣**・山内 尚子***・中沢 正江***

京都産業大学 法学部 2 年次*

京都産業大学 経済学部 1 年次**

京都産業大学 教育支援研究開発センター事務室***

2011 年 12 月 9 日に「燦 presents『京産共創』プロジェクト～京都産業大学をどう創っていくか～」(第 2 回学生と教職員が共に考える FD フォーラム)を実施し、104 名が参加した。これは、学生 FD スタッフ燦のメンバーで取り組む最初のイベントとして、その企画・運営の全てを燦の学生が担った。本イベントの実施により、学生・教員・職員の枠を超えて、本学について語り合えるよい「場」と「機会」を提供することができ、共創風土を醸成するきっかけを得ることができた。本稿は、「京産共創」プロジェクトについての、燦による企画から終了後の振り返りまでの活動の記録である。

キーワード: 本学独自の共創風土の醸成、学生中心の Organization Development、学生 FD、教職学協働

1. はじめに

本学にも授業改善には学生の視点が必要との声から、2010年6月に教育支援研究開発センター主催による「第1回学生と教職員が共に考えるFDフォーラム」が開催され、学生5名がパネラーとして参加したのを契機に、同年、学生FDスタッフが発足した。当初3名の学生が活動をしてしたが、留学等を理由に継続することができなくなった。

そのため、新たに学生を募集し、2011年6月に学生FDスタッフ「燦(SAN)」として、16名の学生で活動を再始動させた。「燦」は、京都産業大学の「産」と同音で、太陽が燦燦と輝くように明るく光り輝く大学になってほしいとの願いをこめて、学生が命名した愛称である。

2011年度は、第1回のフォーラムの趣旨や成果を継承しながらも、企画から運営まで全てを燦の学生が行うという大きな役割を担うことになった。

実施に向け、夏休みを中心に、他大学の学生FDスタッフと積極的に交流をはかり、各大学の取組内容、FD活動における学生の役割を知り、本学では何ができるか、何をすべきかを考えることから始めた。その後、燦は、「授業や教授法」を対象とした狭義のFDに参画するというよりも、学生・教員・職員が一緒になって、皆にとってよりよい京都産業大学を創っていくという広義のFDや、OD

(Organization Development)の視点を持って活動したいとの思いから、フォーラムの名称を「『京産共創』プロジェクト」(以下、「プロジェクト」という)とし、自らが主体となって実施した。

本稿は、燦の企画から終了後の振り返りまでの活動の記録である。本学の学生・教員・職員にこの「『京産共創』プロジェクト」を広く紹介し、今後も、この共創の輪を広げていきたいと考えている。

第1、2、3、5章の、準備、実施内容、今後の課題と展望については、燦の代表である林が報告し、第4章の「共創シート」の結果と分析については、「共創シート」の設計・分析を担当した燦の乙倉が報告する。その上で、職員の立場から重要と感じた点を中心として、第4章については中澤が、他章については山内が追記して報告する。

2. 目的と概要

本プロジェクトの目的(2.1)と概要(2.2)について述べる。

2.1 目的

- ① 普段じっくり話し合う機会がない学生・教員・職員の三者が、互いの立場を超えて意見交流ができる場を提供する。

- ② よりよい京都産業大学を、学生と教職員が共に協力し創造していくための契機とする。
- ③ それぞれが考える問題の所在や大学が目指すべき方向性を明らかにし、「燦」の今後の活動の方向性を検討する材料とする。

2.2 内容の概要

- ・日時:2011 年 12 月 9 日(金)17:00-19:00
- ・場所:5 号館 5405 教室(全体討議)
5402、5403、5404 教室、5321、5322 演習室(しゃべり場)
- ・主催:学生 FD スタッフ「燦」
- ・協力:学生ファシリテータ、F 工房、教育支援研究開発センター
- ・参加人数:計 104 名
(内訳:本学学生58名、教員17名、職員29名)
- ・タイムスケジュール
17:00～ 開会宣言
17:05～ 教育支援研究開発センター 耳野副センター長 挨拶
17:10～ 学生 FD スタッフ「燦」代表挨拶、ルール説明
17:20～ 教室移動
17:25～ アイスブレイク
17:35～ しゃべり場(グループワーク)
18:30～ 教室移動
18:35～ 全体討議(発表(2チーム)、ポスターセッション)
18:45～ 藤岡学長からのコメント
18:55～ 閉会挨拶

2.3.準備

本プロジェクトの企画に至った動機は、夏休み中に行った他大学訪問や学生 FD サミットへの参加を通して、本学でも学生 FD スタッフが企画・運営を行うイベントを行いたい、学生・教員・職員の三者が語り合うしゃべり場を実施してみたいとの思いが燦のメンバー間で生まれたからである。前年度のフォーラムをベースとしながらも、更に新しい要素を加え、より発展的なものにしようとの合意のもとに、具体的な企画内容について、開催 2 ヶ月前の 10 月上旬頃より話し合いを進めた。今回の実施形式を、昨年のパネルディスカッション方式ではなく、しゃべり場方式を採用することにした理由は、今回のプロジェクトを、参加者全員からくまなく意見が挙げられる場とし、また、学生・教員・職員が立場の違いを超えた交流を行える場としたかった

ためである。

それらの目的を達成するために必要不可欠な要素として、準備段階では、特に次の 2 点に注力して取り組んだ。その 2 点とは、本プロジェクトにおける動員目標の設定と達成のための施策と、しゃべり場のファシリテータを担当する燦のファシリテーション能力養成である。

(1)動員目標の設定と達成のための施策

昨年のフォーラム参加者数は 73 名であったが、今年度は開催規模をより大きなものにしたい、本学の将来像について語り合う場となるので可能な限り多くの本学関係者に参加してほしいとの思いから、昨年度実績より約 4 割増の動員目標 100 名(学生 50 名、教員 25 名、職員 25 名)に設定した。

この動員目標を達成するために燦が行った主な施策は以下の通りである。

- ・ 燦の各メンバーに課した動員ノルマ(学生 4 名)
- ・ ポスターの作成、掲示
- ・ 告知ビラの作成、配布
- ・ 立て看板の作成、設置
- ・ 授業内宣伝(約 22 クラス)
- ・ 理系学部ランチタイムトークでの宣伝
- ・ 学内電子掲示板 POST、燦ホームページ、twitter 等での宣伝
- ・ 京都産業大学放送局へのイベント情報宣伝依頼
- ・ クラブやピアサポーター等学生団体への参加呼びかけ
- ・ 教員への参加呼びかけ(研究室訪問等)

(2)燦メンバーのファシリテーション能力の養成

スタッフのファシリテーション能力養成においては、F 工房にご協力をお願いし、ファシリテーション研修を、11 月 15 日、28 日に実施していただいた。研修後はスタッフ同士でしゃべり場のデモンストレーションを計 7 回行い、個々のファシリテータのスキル向上や手法の共有を行った。また、追手門学院大学で開催された「学生 FD の WA!!!」に参加し、2 日間にわたってファシリテーションの手法と、イベントの当日の運営方法を学んだ。この 2 つの研修によって、初めてファシリテータを務めるスタッフの不安を軽減し、スタッフ全体のファシリテーション能力の向上に繋がったと考える。他にも、普段参画している他大学イベントにおいて、本学の立場から参考になる事はないかと食欲に観察・情報収集を行い、ファシリテーションを中心とした運営に役立てている。

3 実施内容

3.1 実施概要

(1) 受付

全体討議会場(5405 教室)前に受付を設置し、受付時にしゃべり場のグループ名を書いたカードを参加者に配布した。一緒に来た友人・同じ所属の人とは異なるグループになるよう配慮し、また、事前申込状況から予測して、各グループの学生・教員・職員の割合が均等となるよう準備をしていたが、事前申込なしで参加した学生が予想以上に多かったため、一部のグループは、学生・教員・職員の構成割合に偏りが生じた。



図1:事前申込をしていない当日参加者の対応に嬉しい悲鳴をあげながら追われている受付カウンター

(2) 開会

開会にあたり、耳野副センター長よりFDに関する説明、「燦」の代表より活動の紹介を行った。その後、今回のしゃべり場における全体ルールを説明し、参加者全員で共有した。今回設定したルールは、以下のとおりである。ルールは、前述の「学生FDのWA!!!」で紹介されたものを参考とし、本プロジェクトに合わせて改変して使用した。

- ① ともかく体験する:体験する事そのものが目的です
- ② 自分ごとの学びの場にする
- ③ 自分も人も尊重する
- ④ 「お土産」は自分で創り出す:貴方の貢献(ポジティブな意見)が場の質を決定します。自分の中の「気づき」を味わう。
- ⑤ 振り返り(フィードバック)を大事にする:自分も他人もよく観察する
- ⑥ 自分で考え、みんなで話し合う(相互に理解する)
 - (ア) 結論は始めに、早めに伝える
 - (イ) 場を独占しない(1人1分以上続けて話さない)
 - (ウ) 具体的な事例、データ、比喻を使いこなす
 - (エ) 相手に正確に伝わっているかどうかを確認する
 - (オ) ユーモアを忘れない



図2:ルールや燦代表の言葉を載せた当日パンフレット(学生と職員で協働して作成。学生・教員・職員の共創モチベーションを刺激するよう意図して構成した。)

(3) しゃべり場

104名の参加者が11グループに分かれ、各教室へ移動した。

「燦」のスタッフまたは学生ファシリテータが、ファシリテータとなり、参加者の緊張感を緩和するため、最初に10分間のアイスブレイクを行った。参加者に①所属学部・部署、②本学へ来て何年目か、③ニックネーム、④今の気分、の4項目についてフリップに記入してもらい、それを用いて自己紹介を行った。

表1:しゃべり場のテーマ

グループ名	しゃべり場テーマ
サギタリウス	魅力ある人とは？
カプリコルヌス	京産(学生生活)で何がしたいか？ 京産に必要なこと！
アクアリウス	求める姿勢・事
	京都産大について(良) 京都産大について(悪)
オフィウクス	友達作りのタイミング
アリエス	やっぱり産大のココがイイ！
タウルス	学生時代に大切なことは？
ゲミニ	京都産大の良いところ
	京都産大の悪いところ
	理想の大学
ヴィルゴ	京産についてどう思うか
リブラ	京都産業大学について思うこと
スコルピウス	京産大について思うこと
レオ	京産について思っていること

次に、しゃべり場を行った(図3、図4参照)。本プロジェ

クトの全体テーマである「京都産業大学をどう創っていくか？」に基づき、各グループの参加者の構成や話しやすさを考慮し、しゃべり場のテーマを設定した上で具体的な議論に入った(表 1 参照)。学生の割合が多かったグループでは、「本学での学生生活をどうしたいか？」といった学生自身がイメージしやすい比較的狭いテーマを設定し、学生・教員・職員の人数のバランスが均衡だったグループでは、「本学の良いところ・改善してほしいところ・本学に求めること」といった広範なテーマを設定していた。



図3:しゃべり場の様子①



図4:しゃべり場の様子②

(議論が盛り上がり、いつの間にか皆が立って議論していた。)

(4) 全体討議

しゃべり場終了後、参加者は全体討議会場(5405教室)に再び集まり、全体討議を行った(図 5 参照)。



図5:全体討議会場の様子

まず、11 グループの中から、代表して2グループ(アクアリウス、タウルス)がしゃべり場での議論内容とその成果を報告した。アクアリウスは、最初に京都産業大学のよいところ、悪いところについて意見を出し合った後、悪い部分を改善し、よい部分をさらに伸ばしていくために、学生、教員、職員に「求められる姿勢・事」について、今後の自分への決意表明も兼ねて、それぞれが考えを発表した。タウルスは、「学生時代に大切なことは？」をテーマに議論した。4年間で「様々な経験をする」ということが一番大切である。その結果が、たとえ成功でも、失敗でも、その過程で苦勞し悩みながらも、問題解決能力を身に付けており、そしてそれらが次への「モチベーション」や「人とのつながり」へと繋がるというプロセスを図示し、発表した(図6参照)。



図6:しゃべり場の成果発表の様子

最後に、藤岡一郎学長から、「このプロジェクトは、今日1日限りで終わらせることなく、『京都産業大学の将来をこうしたい』という夢を学生・教員・職員が語れる場として、今後もぜひ継続してほしい」とのコメントがあった。

プロジェクト終了後も、会場には藤岡学長をはじめ、多くの参加者残り、しゃべり場の各グループの成果物を見ながら、大学に対する思いや夢を熱く語り合っていた(図7参照)。

これは、参加者が互いの共創への想いを交換し、良い刺激を得られた結果のひとつの現れであると考えられる。



図7:プロジェクト終了後の様子

(藤岡学長を交えて、学生・教職員がしゃべり場の続きをしていた。)

3.2. しゃべり場に出された特徴的な意見

燦では、各グループのしゃべり場の内容を数回のミーティングに分けて振り返り、共有している。ここでは、そこでの議論を基礎とし、筆者(林)の視点から各しゃべり場の内容を総括する。

表 2. 京都産業大学の良いところ

順位	意見内容	総数
①	自然が豊か	22
②	一拠点総合大学	21
③	学生が元気・明るい	11
④	食堂が充実している	5
⑤	図書館が広くて綺麗	4
⑥	キャリア教育が充実している	3
⑥	履修科目の自由度が高い	3
⑥	授業が楽しい・おもしろい	3
⑥	活気がある	3

(1)京都産業大学の良いところ

今回のプロジェクト参加者が、現状の京都産業大学の良いと感じているところ、満足しているところとして、「キャンパス環境の良さ」、「一拠点総合大学であること」、「学生が明るく元気であること」の3つが特に多く挙げた(表2参照)。他に、本学の教育の特色としているキャリア教育、フレキシブルカリキュラム等、学部を超えた履修が充実しているという、学生からの肯定的な意見が見られた。「授業が楽しい・おもしろい」という意見についても、今後具体的に議論を掘り下げていく必要があるだろう。

表 3. 京都産業大学の改善してほしいところ

順位	意見内容	総数
①	交通アクセス	13
②	学生のマナー(ゴミ捨て、食堂、喫煙)	12
③	授業中の私語	6
④	最近の学生はおとなしい	5
④	キャンパス内の環境(坂・階段)	5
⑥	キャンパス内の環境(窓口や施設の閉室時間が早い)	3

(2)京都産業大学の改善してほしいところ

一方、京都産業大学の改善してほしいところとして、「交通アクセスの不便さ」、「学生のマナーの悪さ」の2つが多

く挙げた(表3参照)。また、キャンパス内の環境については、学生部や教学センター等の学生相談窓口の開室時間を延長してほしい、自習できる場所の増設、夜遅くまで勉強できる環境を整備してほしいといった具体的な要望があった。

その他に、主に教職員から「最近の学生はおとなしい、自信がない」といった声もあり、4年間で多くの学生と交流し、様々な成功・失敗経験を通じて成長したい・してほしいと考える参加者が多かった。授業、課外活動等のあらゆる場面で学生が活躍できる場、そのような学生を、学生・教員・職員が皆で応援する雰囲気にする事で、さらに元気のある学生を増やし、活気のあるキャンパスにしたいという意見が多く見受けられた。

これは、参加者が、大学構成員として、「学生が、より活き活きとするキャンパスにしていきたい」という意見を共有できたひとつの証拠と言えるだろう。

4 共創シートの設計と結果データ

ここでは、本イベント終了時に参加者を対象に行った質問表(以下「共創シート」と呼ぶ)を使った調査の狙い(4.1)、回答者数(4.2)、及びその結果(4.3)について述べる。尚、本調査の詳細な報告は別途行うため、ここでは「共創風土の醸成」という観点から概要を述べる。

4.1 共創シートの狙い

共創シートは、「本イベントが、本学構成員の、どのような層(学生・教員・職員の別、あるいは各回答者の帰属意識の程度の別による層)に、それぞれどのように受け止められたのか」をデータの面から明らかにすることを狙ったものである。更には、得られたデータを分析し、今後の活動方針やイベント開催に反映させることで、学生や教職員の京都産大への共創意識の向上を支援することを目標としている。

4.2 共創シートの内容

本フォーラムの参加者数は、学生58名、教員17名、職員29名、合計104名であり、回答者数は、そのうち、学生32名(82.1%※運営スタッフを除くため。以下同)、教員11名(64.7%)、職員22名(91.7%)、合計67名であった。()内は回答率である。

表 5. 学生・教員・職員別共創シート結果の一覧(学生 N=32, 教員 N=11, 職員 N=22)

I. 回答者属性調査		学生	教員	職員
I-I. 産大帰属意識		3.81	4.28	4.62
8	京都産業大学が好きだ	4.06	4.20	4.59
11	京都産業大学の学生が好きだ	3.56	4.36	4.64
I-II. 大学運営モチベーション		3.79	4.32	4.41
1	以前から大学に関して何かしたいと思っていた	4.03	4.09	4.82
10	京都産業大学に貢献するのは京都産業大学の構成員の義務だと思う	3.56	4.55	4.00
I-III. シャベリ場適応度		3.27	3.30	3.65
2	自分は積極的に自己表現する方だと思う	3.22	3.27	4.00
3	初対面の人と話すのが好きだ	3.31	2.82	3.82
13	何かを考えたり、創ったりするより、与えられた課題に取り組む方が好きだ*	3.28	3.82	3.14
I-IV. 課外活動における充実度		3.77	3.45	3.91
4	クラブ・サークル活動で自分は充実している(学生の頃充実していた)	3.75	3.45	3.91
5	クラブ・サークル活動以外の課外活動で自分は充実している(学生の頃充実していた)	3.78	3.45	3.91
I-V. 正課活動における充実度		3.92	4.20	3.77
6	授業で学ぶのが好きだ(学生の頃好きだった)	3.59	4.40	3.06
7	好きな授業・後輩に勧めたい授業が、京都産業大学には1つ以上ある	4.25	4.00	4.48
II. イベント全体での共感度調査		学生	教員	職員
II-I. 場の価値		4.67	4.14	4.73
14	楽しかったと思う	4.72	4.09	4.77
20	参加した甲斐があったと思う	4.63	4.18	4.68
II-II. 大学を創る意欲の喚起		4.44	4.09	4.64
16	一緒に大学に関して何かをしたいと思うようになった	4.38	3.82	4.68
18	大学を共に創ろうとは思えなかった*	4.50	4.36	4.59
II-III. 大学の活性化		4.55	4.50	4.48
15	イベントスタッフがいきいきしていた	4.66	4.73	4.60
17	周囲の参加者はつまらなそうだった*	4.44	4.27	4.36
II-IV. 構成員同士の親近感の増幅		4.33	4.33	4.37
19	他の参加者に対し、以前より親近感が持てるようになった	4.22	4.30	4.23
21	アットホームな雰囲気があった	4.44	4.36	4.50
III. シャベリ場での共感度調査		学生	教員	職員
III-I. シャベリ場モチベーションの喚起		4.52	4.14	4.36
22	シャベリ場は、時間が短く、もの足りなかった	4.47	3.91	4.09
23	シャベリ場は、時間が長過ぎ、途中で飽きてしまった*	4.56	4.36	4.62
III-II. 意見の出しやすさ		4.14	4.32	4.09
24	シャベリ場では、自分はリラックスして意見を言う事ができた	4.03	4.27	4.32
25	シャベリ場で、グループの参加者は概ね自由に発言できていたと思う	4.25	4.36	3.86
III-III. シャベリ場の価値		4.45	4.43	4.81
26	シャベリ場には、意義を感じない*	4.31	4.45	4.91
27	シャベリ場で、学生・教員・職員でしゃべってみてよかった	4.72	4.45	4.82
34	シャベリ場では、なんの気づきも得られなかった*	4.31	4.40	4.71
III-IV. 相互理解の促進		4.38	4.64	4.59
28	シャベリ場では、私の言いたいことは誰にも伝わらなかった*	4.19	4.64	4.55
29	シャベリ場で、周囲の人々は互いの意見に耳を傾けていた	4.56	4.64	4.64
III-V. グループごとのテーマをもっと自由に		3.79	3.64	3.36
30	具体的なテーマを与えられて話す方が話しやすい*	4.06	4.27	3.86
31	テーマはグループごとに自由に決めて話したい	3.53	3.00	2.86
III-VI. 全体ルールの必要性		3.61	3.65	3.81
32	シャベリ場の前にルールの提示があったのは役立ったと思う	3.91	3.80	3.81
33	シャベリ場のルールはグループごとに決めたかった*	3.31	3.50	3.80

※表中、最も左の列のアラビア数字は設問番号(掲載順に付与)を示している。

※数値は、各項目の平均値であり、4.00 以上をゴシックで、4.50 以上をマーカーで示している。

※設問文末尾に*が付与されている項目は、反転項目である。

4.3. 共創シートの結果

本稿では、次の3つの調査結果について、学生・教員・職員別に集計を行い、分析した(表5)。

I. 回答者属性調査(5調査項目・11設問)

II. イベント全体での共感度調査(4調査項目・8設問)

III. しゃべり場での共感度調査(6調査項目・13設問)

次の調査IVについては、単純集計を行い、参加者からの要望をまとめた(表6)。

IV. 次回イベントへの要望等聴取(5設問)

尚、本調査では、I~IVともに、回答はすべて「共感する」「どちらかという共感する」「どちらでもない」「どちらかという共感しない」「共感しない」の5段階で評価させた。

それぞれの調査で得られた結論を以下に抜粋する。

I. 回答者属性調査においては、教員・職員は、もともとの産大帰属意識・大学運営モチベーションが高い層が本イベントに参加したと考えられることが判明した(表5のI-I及びI-II)。特に職員については、産大帰属意識の項目が4.50を越えており、非常に帰属意識が高い層が参加したと推測された。ここから、OD的観点からみて高いモチベーションを持つことが、本プロジェクト参加者の特徴だったと言えるだろう。

II. イベント全体での共感度調査では、参加者が本プロジェクトという場の価値を高く評価(表5のII-I)し、大学を創る意欲が喚起され(同II-II)、大学の活性化を実感し(同II-III)、構成員同士の親近感が増幅されたと感じている(同II-IV)様子が観察された。

III. しゃべり場での共感度調査では、参加者が、しゃべり場への意欲が喚起されたと感じ(表5のIII-I)、相互理解が促進されたと感じ(同III-II)、しゃべり場の価値を高く評価している(同III-III)様子が観察された。ファシリテーションに関して練習を重ねた成果か、「意見の出しやすさ」についても一定の評価を得た(同III-IV)。

このように、本学では、共創風土を醸成する第一歩をうまく踏み出せたと考えて良いと思われる。

最後に、IVの次回イベントへの要望等聴取において、表6のような結果を得た。

今後も、今回と同様に、平日夕方の開催を望む声が最も大きい。イベントの長さを短くして参加しやすくして欲しいという声はそれほど多くないようだ。今後、同じようなイベントがあれば参加したいという項目は、回答者平均値

が、4.50を超える結果となり、かなり強い希望と解釈できる。

表6. 次回イベントへの要望聴取等の結果

設問番号と設問文		設問 平均値
35	今後も、平日の6限以降が参加しやすい	3.84
36	土日に開催する方が参加しやすい	1.91
37	水曜の午後に参加しやすい	2.83
38	もっと気軽に参加できるショートイベント(1時間程度)にして欲しい	2.23
39	今後も語り合う機会があれば参加したい	4.52

5. 今後の課題と展望

5.1 燦の活動における今後の課題

再始動してから約半年、今回燦が企画・運営する初めてのイベントで、プロジェクトのテーマ設定、参加者の動員、当日の受付・司会進行、しゃべり場のファシリテータ等全ての役割を学生が担った。前章の共創シートの結果からもわかるとおり、参加者の満足度は非常に高く、今回のプロジェクトは一定の成果があったと評価できるだろう。

しかし一方で、今回の参加者は、大学への帰属意識、大学運営へのモチベーション、しゃべり場適応度が、いずれも高い層であることから、とりわけ、しゃべり場の運営においては、個々のファシリテータのスキルのみならず、参加者に助けられた部分も大きかったように見受けられた。

今後、意欲が中間・低い層への拡大を見据えると、参加者がどのグループに入っても満足のいくしゃべり場を体験してもらえよう、運営する燦のファシリテータスキルのさらなる向上が必須である。今回のような、F工房によるファシリテータ研修やしゃべり場デモンストレーションを数多く経験し、ファシリテータ全体のスキルを向上させていく必要がある。

5.2 京産共創プロジェクトの今後の課題と展望

今回のプロジェクトでは、104名の参加者から京都産業大学のよいところ、改善してほしいところ、理想の大学像等に関する様々な意見や要望を得ることができた。これらの声を具現化していくためには、次の2点が重要になると思われる。

1点目は、この「京産共創プロジェクト」に「継続性」を持って取り組んでいくことである。参加者から寄せられた声で多かったのが、「今後もこのプロジェクトを継続して行っ

ていってほしい」ということであった。藤岡学長からも3.1(4)で前述の通り、『「京都産業大学の将来をこうしたい」という夢を学生・教員・職員が語れる場として、今後もぜひ継続してほしい」とのコメントがあった。今回のプロジェクトでなされた議論をさらに掘り下げていく「場」の提供を引き続き行う必要がある。

2点目は、当プロジェクトで出された意見を具現化するには、「京産共創」に込められた、京都産業大学を学生・教員・職員の三者が共に協力して創っていくという認識を皆が持つことである。この目標は、一朝一夕で実現できるものではなく、日々のたゆまぬ努力の積み重ねから実現されていくものである。そのためには、私たち「燦」のメンバーが、同じような志を持ち活動しているピアサポーターや志学会執行委員会等の学生団体間との連携、教員、職員を交えた三者と共創しながら、京産共創プロジェクトでの取組をOD(Organization Development)に繋げていきたい。

謝辞

日頃より「燦」の活動をご理解、ご支援いただいている藤岡一郎学長をはじめ、本プロジェクトの運営にご協力いただいたF工房の教職員の皆様、学生ファシリテータの荒木豊さん(経済学部4年次)、片岡信二さん(経営学部4年次)、浅野光紀さん(経営学部2年次)に深く感謝申し上げます。

また、授業時間内広報にご協力くださった先生方、ピアサポーター、志学会執行委員会、新聞局等学生団体の皆様、ご多用のところ参加してくださった104名の学生・教員・職員の皆様に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

【学生FDスタッフ「燦(SAN)」メンバー】

- ・林 隆二 (法学部2年次):学生FDスタッフ「燦」代表
- ・大谷 麻予 (法学部4年次)
- ・岩倉 一憲 (経済学部3年次)
- ・曾我 好雄 (経済学部3年次)
- ・黒田 大輔 (法学部3年次)
- ・妹野 雄貴 (法学部3年次)
- ・中島 直行 (法学部3年次)
- ・川崎 悠 (外国語学部3年次)
- ・吉田 天平 (理学部3年次)
- ・藤井 悦子 (経営学部2年次)
- ・伊藤 琴音 (法学部2年次)
- ・芝山 侑希 (文化学部2年次)

- ・森廣 晋也 (文化学部2年次)
- ・雑賀 一成 (文化学部2年次)
- ・乙倉 孝臣 (経済学部1年次)
- ・南 太貴 (経済学部1年次)

当プロジェクトへの参加を機に、「燦」に加入したメンバー

- ・伊藤 章達 (経済学部3年次)
- ・杉本 眞理 (法学部3年次)

2012年1月10日受理

†Ryuji HAYASHI*, Takaomi OTOKURA**, Naoko YAMAUCHI***, Masae NAKAZAWA***: Development of KSU Co-creating Culture – The Practice of Student-centered Organization Development -

*Faculty of Law, Kyoto Sangyo University Kamigamo Motoyama, Kitaku, Kyoto city, Kyoto, 603-8555 Japan

**Faculty of Economics, Kyoto Sangyo University Kamigamo Motoyama, Kitaku, Kyoto city, Kyoto, 603-8555 Japan

***Center for Research and Development for Educational Support, Kyoto Sangyo University Kamigamo Motoyama, Kitaku, Kyoto city, Kyoto, 603-8555 Japan